

## 中学時代の村上先生との思い出

二〇回生 長谷川 宏有

吹田市立第一中学校 昭和二七年卒業生

### 1. 中学時代の雰囲気

平成十四年(2000年)八月に中学同窓会幹事様より吹田一中五〇周年記念同窓会を、村上三島先生ご出席のもとに十月十二日(金)開催という案内を頂き、大阪を離れて以来千里山を一度も訪れた事のない私も喜んで参加させて頂きました。

中学卒業以来五十年ぶりに会う同窓生の懐かしい顔々、村上先生をはじめ先生方の長い間に人生の年輪を刻まれたお顔を拝見しているうちに、一気に中学時代にタイムスリップする思いでした。

中学時代何でも興味のあった私は陸上競技部(チームは大阪府ではそれなりの位置にあったと思う)をはじめ、天文部(夜の中学校の丘に集まり天体観察・星

座の勉強)、歴史部(休日に京都・奈良の古寺の見学、特に普通では入れない京都西本願寺の庭内に移設されている二条城の飛雲閣の中にあつた竹のすのこを敷き下からスチームで暖める風呂。ここに敷いたのがいわゆる「風呂敷」と武田先生から教わつたのは現物を目の前で見ているだけに今も鮮明に覚えています)などに参加。三年の担任浜口先生の御教唆に基づき、愛鳥週間の作文を苦しみながら作り大阪府に出した思い出

又国語の若い女性の先生がいつも脚を組んで座つていらした生徒用の木製の椅子に皆で悪戯細工をし、腰から落ちて大騒ぎ。その報いで教室の前の中庭に男子全員立たされ男性教師から往復ビンタを受けた記憶など、今思い出してもおおらかで楽しい思い出の多い中学時代でした。

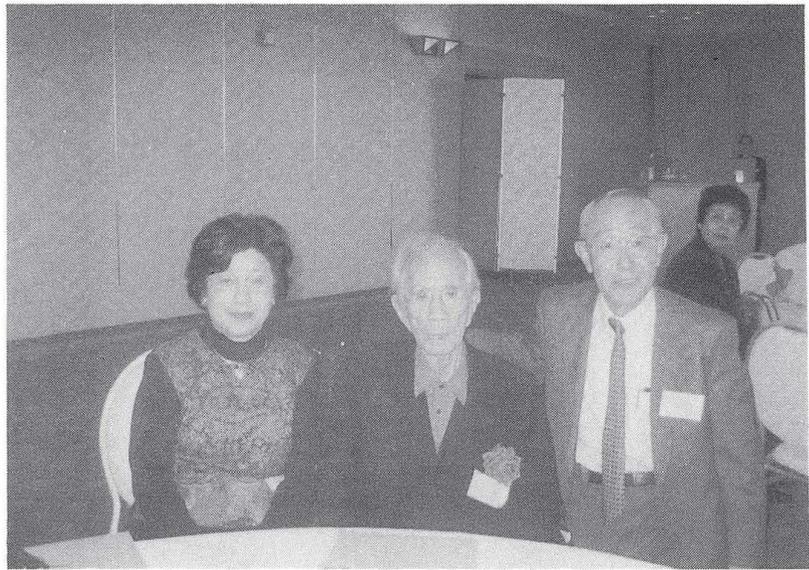
その中にあり書道の先生であつた村上先生の雰囲気は、子供心にも何か一種特別のものがあつて、足がお悪く少し不自由でいらしたので悪童どもは「海賊キッド」と陰で呼びはしたものの、ある種の威厳を感じていたものです。

### 2. 書道塾の思い出

この村上先生については、中学時代遊びに忙しかつた私が、どういう訳か、吹田の町中にある先生の書道塾に通うようになり、昔ながらの寺子屋風の二階の大部屋で長い机に皆が並んで正座し、先生から与えられた手本を見て何枚か書いては隣接する八畳位の先生の部屋に持つてゆき、朱筆で添削してもらつていました。そのうち私は書いて添削してもらつていただけはつまらなくなり、先生の部屋に入った時には、先生の座つていらつしやる奥に雑然と積んであつた書道関係の書籍の他に美術雑誌「みずえ」があるのを見つけ、これをパラパラと見るのが楽しみとなり、

「先生 慎重にゆつくり書くのも良いのですが、筆運のスピード感も必要ですよね」

と生意気なことを言いながら人より早く書き上げて先生の部屋の奥に座り込み、この雑誌等を見ていたものです。その中で特に気に入っていたのがペリー・ムーアの彫刻の写真で、中学時代の工作の時間にこのムーアの「母子像」を木製のペン皿に彫つたり、又古代遺跡の資料からピエログラフの象形文字を紋様にして、



2000年8月 小山(西岡) 妙佳子・村上三島先生・長谷川宏有

木製のペン立てに彫ったりしたのも（このペン立ては今も手元にあります）この村上先生の書物からでした。お陰でそれ以来ずっとヘンリー・ムーアが気に入っており、箱根にある「彫刻の森美術館」の庭園に散在するムーアの作品を観るにつけ、いつも先生と先生の奥の部屋を思い出します。

又 この先生の奥の部屋にあった書籍の山の中から太平洋を往復する豪華客船一等船客用の食卓メニューを見つければ、これを眺めていると先生は、

「これは兄さん（か誰か親族の方で今となつては思い出せないのですが）がプレジデント・ウィルソン号でアメリカに往く船旅で朝昼晩毎日食事毎に違ったメニューが、このように素晴らしいカラーでテーブルに出ているので纏めて私の所に送ってきてくれるのだよ。アメリカの豪華客船ではこんなに素晴らしいメニューを多色刷りで印刷する印刷機が既に積んであり毎食前に印刷し提供しているんだね」

と説明して頂きました。メニュー表紙の極彩色の花模様も毎回異なっておりましたし、メニュー内側の多くは今考えるとフランス語で料理の名前はチンプンカンブンでしたが、それでも自分も本当に太平洋の大海

は寡聞にして知りません。

### 3. 先生の中学教師退任と我々の卒業

中学時代の最後の思い出としては、三年生の卒業間際の時に何かの用事で休日の学校に行くと、教員室になにやら人の気配があり誰かいるのかと入っていくと村上先生がシャツを腕まくりして何かを書いておられます。近づいてみると机の上には卒業証書が積み上げられてありました。なんと先生は前から少しづつ卒業生全員の卒業証書を一枚一枚筆で書いておられたのです。

先生もこの年度末で退職されるので卒業生一人一人筆に思いを込めて書いておられたのでしょう。これを知っておりましたから、私は先生自筆のこの卒業証書だけはと大切に保管しつつづけてきたつもりが、今探すと出てきません。何度かの国内外の引越しの折りに紛失したのかも知れませんが全く残念でなりません。もし皆さんの中でまだ卒業記念としてお持ちなら先生の思い出としても大切にしてください。

又我々の卒業時に先制も退職されたのですが、その折りに、

原を航行する船上で、このメニューを見ながら食事するといふ夢を抱かせてくれるような楽しい会話でした。さらにこの書道塾での先生との話で思い出すのは、先生との筆毛先の問答の事です。

「書道の筆毛のよいものはその毛先が細くなり究極的に尖っているもので、動物の毛は動き回っている為に体全体のうちどの部位の毛でも大抵毛先は顕微鏡で見ると既に毛先は丸くなっており駄目なので、生まれただばかりの動物の脇の下の毛で作るのが最上なんだよ」と教えて頂き、

「この筆を見てごらん。毛先が鋭く尖っているだろう。何の毛で作ったものか分かるかね」

とにこにこしながらおっしゃいました。もちろん私に分かる訳もなくあてずっぽうに狐、狸、兎などの名前を挙げましたが、すべて首を横に振られ、

「実はこの筆は自分の子供が生まれたばかりの時にその頭髪で作ったのだよ。これは世界に一つしかない大切なもの。だから大事に使うつもりだよ」

とそつと教えてくださいました。なんと先生は生まれたばかりの、自分の赤ちゃんの頭髪で筆を作られていたのです。その後この筆をどの様に使用されたのか

「自分はこれから書道一本でゆく。精進して向こう三年で必ず日本一になる。君たちも卒業後いろいろな道を歩むだろうが、初志貫徹、目標に向かって邁進してほしい。」

と高らかに宣言されました。さすがは村上先生翌年には日展入選、三年で日展特選となりその後すぐに無審査となられ、以降のご活躍は皆様ご承知の通りです。

この中学卒業時の先生の退路を断つた決意のお言葉はその後ずっと私の心の奥底にあり、今も私の人生訓となっております。

村上先生とこの様に接する事ができた中学三年間を心から誇りに思うと共に、社会人になった後も新人社員や中堅幹部の研修で話す機会のある折には、この中学卒業時の先生のお言葉を引用し受講生に話すことがよくありました。

このように無名時代の村上先生と、生徒の関係であっても、永く思い出の残る接点があったことは、私にとつて素晴らしい財産となり、いつも懐かしく思い出しております。村上先生本当に有難うございました。天寿を全うされた今、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌